

蓑虫はだれの子か

——『枕草子』「虫は」の比較口承文芸論的考察——

鈴木 満

(一)

ドイツ南西地方ホッホ・シュヴァルツヴァルトの緩やかな山並みが西からライン平野に下つて来る途中にあるホルベン・バイ・フライブルク Horben bei Freiburg という村落で、私ども夫婦と九歳の娘、五歳の息子の家族四人が一九八二年の春から八三年の春までほぼ一年を過ごしたことがある。村の大方は標高三五〇—九〇〇メートルのなだらかな斜面に広がる広大な牧草地とライ麦・燕麦・玉蜀黍とうもろこしの畑で、やや急峻な山肌の部分は牛・馬・羊が点々と草を喰はむ牧場として利用されている。村役場ラトハウスと四年制の尋常小学校グランドシュールとカトリック教会の周りに人家がいくらか軒を並べているのを除けば、あとは農家が三三五五、あるいは全く孤立して散らばっているに過ぎない。そうしてそのうちのかなりが〔特にカツエンタール Katzenthal では〕いまだにこの地方独特の美しい線を持つ屋根を戴いている。早くも一
一二年の古文書に名が出ているそうだが、一五二五年既に二十六戸あった、という農家が大して増えてもおらず、

私どもが滞在した当時は人口八六〇ほど、バーデン・ヴェルテンベルク州シュヴァルト＝ブライスガウ郡内で最小の自治体だった。

開墾されていない所は多く常緑の樅の森で、それに檜・山毛櫨・ドイツ唐檜・白樺が交じって、すくすくと並んだ高い梢に降った雨が、枝を濡らし幹を伝い、僅かな下生えの草や天鵞絨のような苔に滲みこんで、やがてそこから小さい泉となつて現われると、それらは更に清冽な小川に集い、十五キロ程離れた古雅な大都市フライブルク・イム・ブライスガウ Feiburg im Breisgau 指して流れ下つて行く。この小川がうねる、さして広からぬ谷の南斜面の上のほうに私どもの仮寓があった。谷を隔てて向かい側に、草木に鬱蒼と覆われた穏かな佇まいの山が幾つか重なつて次第に高くなる。目に見えるその最高処をシャウインスラント〔国をご覧〕Schauinsland といい、名詮みよせん自性じしやう、まことに見晴らしの良い峰で、ここに登ると、晴れていけば、東方にシュヴァルトで最も高いフェルトベルク（一四九三メートル）を、そしてその彼方にはアルプスの山稜を、あたかも指呼の間のごとくに臨むことができる。新鑄の銀貨のような月がちょうどこの峰の上から出ると、墨を流したような山山のシルエットにひとしお風情が漂う。九月初めの満月の宵は久しぶりで「隈無き月」を心行くまで眺めたものである。

住まいの三方が山で、めつたに人声もしないため、鳥たちの囀りがほしいままにこた餌を呼ぶ。春から初夏にかけては、明け方の三時ごろから朗らかな声に眠りを破られることがしばしばだった。全身艶やかな黒で、嘴だけが鮮やかに黄色く、物怖じしない賢い目付きをした黒歌鳥 Amstel である。けれども五月末ともなると、夜明けの歌い手たちはいつか次第にひっそりとして行った。このあたりから代わってだんだん耳に親しむようになったのは虫の声である。私が最も早くに気づいた声の主はたしか蟋蟀 Feldgrille だった。太陽が昇るとそこいら中からチとりの中間のような声が湧いて来る。単調だがこころよい。ドイツ人にはツイルプ・ツイルプ・ツイルプと聴こえるそうである。夏時間

とあつて日はまだまだ高いのに時計に従つて家族で夕方の散歩にでかけると、小径わきのほの暗い草叢ですだいている。とつぷりと暮れた宵、テラスに出て遠近の家家の灯火を人懐かしく眺めていて、ふと我に返ると周囲は潮騒のような合唱である。数が多い上、とぎれることがないから、「灰汁桶のしずくやみけりきりぎりす」（凡兆）の哀れこそそそらないが、これはこれで心気が澄む思いがする。そうこうするうち子どもたちの夏休みが早くも八月半ばに終わり、それからほんのちよつと日数が経つと、朝吐く息が白く見えるようになった。Feldgrille 以外名は未詳だが、虫の音には少なくともまだ三―四種があることも分かった。翅をこすりあわせる時間の長短、間拍子の取り方に差こそあれ、日本の蟋蟀・螽螂に較べ音程はいずれも低く、人に譬えればバリトン・アルトという所か。夏の間は晴れていてもぼうつと薄く霧がかかっていた山山が、突き抜けるような青天を背景にくつきりと稜線を描く。一足飛びの秋である。

ホルベンの山には黄櫨や楓が無いからどのみち燃えるような紅葉は観られないが、縦に混じる落葉樹の葉は鮮やかな黄に変わる。これは十月の寒気が到来してからである。虫の声もいつかひっそりと消えている。過ぎて行つた短い夏の間、ついで蟬の声を耳にしなかつたことに気づいておかしくなつた。そこで図鑑無しで日本の蟬にはどんな種類があつたか思い出そうとしてみる。まず 蝸。蝸は夏もけつこう早くから鳴く。もつとも私が小学校時代、蝸の聲が耳に入るようになるのは、新学期を目前にして不得手な工作類の宿題作成に追われていた八月下旬だから、蝸はその時分、それも黄昏時に、侘しい気分の折カナカナカナと寂しく鳴くものだ、と長いこと思い込んでいたが、『枕草子』「虫は」には十四種の虫が挙げられているが、蟬の一族で触れられているのはこの蝸だけである。蝸以外の蟬たちにも捨てがたい風情がある、と世間一般に思われるようになったのは、やはり立石寺での芭蕉の一句「閑さや岩にしみいる蟬の声」以来であろうか。油蟬はそれでも名からして脂汗・油照り・油手・油足などの連想を呼んで暑苦

しいとはいへ、シャンシャンシャンと響き高らかな熊蟬や、ミンミンと声振り絞るみんなん蟬は、何がなし連歌師権大僧都心敬のいわゆる「ひえさびたる方」を悟らせるような気がする。法師蟬はひとしお興趣を添える。去つて行く夏が「つくづく惜し」と託つばかりでなく、その長い疊句の締め括りとして、スペイン語で *adios, adios*、*adios* と夏に別れを告げている。さて、イソップ寓話の「蟻と蟬」が、北ヨーロッパで「蟻と蝨」に変えられたのは、緯度の高いこの地方に蟬がないからである。盛夏上野動物園の園長室で歓談していたさる高名なドイツの動物学者が、お土産に何でもお望みの動物を、と奨められると、やおら窓の外を見据え、「あの鳴く樹を」と言った、という「あまりまことしやかならざる」逸話がある。もし本当の話だとすれば、当然これはなにかも承知の上での冗談なのだが、蟬を知らないドイツ人はあの声を聴くと真実びつくりするらしい。さるドイツの知人から、女友たちが日本にでかけ、蟬の声にぎよつとして、「あのうるさい鳥はなに」と訊ねた、という話をかたて私は聞かされた。これは実感がある。その女性は、中国文学を専攻している上、日本語も学んでいたそうだが。そういえば虚心に聞くと蟬は大方うるさいはず。日本人は、この虫の地上での生命があまりにも短く、勢い猛に夏の盛りを謳い続けたものやがて忍び寄る秋の気配とともにひっそりと消えて行くことを知っていればこそ、降るような蟬の斉唱に「蟬時雨」なる優しい詞を当てることができるのである。

(二)

京のあの特有の夏の蒸し暑さをひたすら垂れこめて忍んだであろう清少納言が、ようやく日が落ちる頃合、あるいは幾分か爽やかな暁に、細い澄んだ声を響かせる蜩のみを蟬たちの中で好もしく思ったとしても無理は無い。「七月ばかりに、風いたう吹きて、雨などさわがしき日、おほかたいとすずしければ、扇もうち忘れたるに、汗の香すこし

かかへたる綿衣わたぎぬの薄きを、いとよく引き着て、昼寝したるこそをかしけれ。」と別の段に書いているのからしても、この女性にとつて蝸以外の蟬は暑さと切つても切れない存在として、考えるのも物憂かつたかも知れない。

並立しうる別の観方もある。「虫は」に登場する虫たちのうち、「にくし」とかたづけられている蠅と蟻を除き、あの十二種を列記してみると、この筆者が彼ら彼女らを愛する所以が分かる。鈴虫（今の松虫だという）・松虫（今の鈴虫だという）・はたおり（今の蝨蝨だという）・きりぎりす（今の蟋蟀だという）・蝶・われから（海藻に付く小さな甲殻類）・ひをむし（蜉蝣）・螢・蓑虫・蝸・額づき虫（采搗虫）・夏虫（火取り虫のたぐいといわれる）、これらはすべてあえかで儂い。無常感を募らせる。そして可愛らしい。従つて、蝸以外の蟬たちは京童（きょうわらんべ）のごとくわわしく、逞しく思われて、採りあげる気にはなれなかつた、とも考えられる。とは言え、清女の才筆に洩れたのが不思議な虫はいくらでも挙げられる。私たち日本人の身近にいて、子どもにもすぐ思い浮かべられる面々としては、蝸（かまきり）、飛蝗（ばった）、黄金虫、甲虫、蜜蜂、怖いものでは蜘蛛（もも）、愛嬌者は螻蛄（わづら）といったところ。その名にちなんで私たちの祖先が、たまたなく青垣山籠もれる大和の国の美称とした「秋津島」のあきつ、つまり蜻蛉（とんぼ）も書かれていない。やはり羽虫を餌とするので総じて猛猛しく思われたのだろうか。秋茜（あきあかね）（赤蜻蛉）は風情があるが、諸人の崇敬する厨子（ずし）を、黄金（こがね）・白銀（しろがね）に代わつて莊嚴（しょうごん）した玉虫さえ言及されていないのは、その金属的な美しさ、厳めしさのゆえに憚られたのかも知れない。もつとも、「枕草子」に書かれなくとも、日本人に親しまれている虫たちは俗謡・童唄に歌われて長い齢を経ている。

「でんでん虫」というからこれも虫とすれば、子どもたちが「角出せ、槍出せ、頭出せ」と蝸牛（かたせむし）を遊び相手にしたのが昨日や今日のことでない証には、

舞へ舞へ 蝸牛かたつむり

舞はぬものならば

馬ひまの子や牛の子に

蹴くゑさせてん 踏わみ破わらせてん

実まことに美しく舞まふたらば

華はの園いまで遊あそばせん

と愉たのしいのがある。

茨うばら小こ木ぎの下したには

鼩いたち笛ふえ吹ふく

猿さるかなつ

稻いな子こ丸まるは拍ひ子こ打うつ

蟋しゅう蟀こは鉦しょう鼓こ打うつ

というあの剽せうげた歌詞かの無名むななの作者さくしやは、『鳥獸戯画ちゆうぶつぎが』を描えいた鳥羽僧正ちゆうふそうじやう覚かく猷ゆうと相通あひたうずる精神しんしんを持もっているようで、ゆかしい限りである。

ところで、「虫は」の段で最大のスペースを割かれ、また読む者の関心を最も惹くのは、いうまでもなく蓑虫すゐちゆうにつ

いての記事である。テキストを左に二つ掲げる。段の数こそ違え内容はいずれも大同小異である。

テキスト①

(前略) 蓑虫、いとあはれなり。鬼おにの生みければ、親に似て、これもおそろしき心こころちぞあらむとて、親のあしき衣をひき着せて、「いま秋風吹かむをりにぞ来こむずる。待てよ」と言ひて、逃げていにけるも知らず、風の音聞き知りて、八月ばかりになれば、「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴く。いみじくあはれなり。(五〇段)^③

テキスト②

(前略)

みのむし、いと哀あはれ也。おにの生みたりければ、親に似て、是もおそろしき心あらんとて、親の、あやしき衣きぬひきさせて、「いま、秋風ふかん折こぞ来んとする。まてよ」といひおきてにげて去いにけるもしらず、風の音を聞きしりて、八月ばかりになれば、「ち、よ、く」とはかなげになく、いみじう哀也。(四〇段)^④

「いとあはれなり(いと哀也)」、「いみじくあはれなり(いみじう哀也)」、と冒頭・末尾に繰り返していることから見ても、この鱗翅目りんしミノガ科の昆虫が並並ならず清女の興趣をそそつたことは間違いない。さすが近頃の子どもはやらないだろうが、昔むかしのその昔、私がまだ小さかった頃、あまり所在が無いと、軒端のきばの隅や前栽せんざいの枝にぶらさがっている蓑虫を幾匹も集め、安全剃刀の刃を慎重に使用して衣を切り開き、中の体をそつと引き出したものである。更にそれを母にねだつた真綿とか、切りこま裂いた色紙いろがみなどと一緒に一晩、硝子壺か箱の中に入れておく。暖か

い着物を脱がされた虫は、一所懸命に口から糸を吐き、周囲の素材を連ねて、翌日には見事な新調のコートにくるまっている。それをいつまでも飽きずに眺めたものである。ドイツでは糞虫を「葉っぱの仕立て屋」Blattschneider という。肯綮こうけいに中あたつた命名である。糞虫のおもしろさは、蝸牛や蜻蛉、あるいは甲虫のように、幼い者の好い遊び相手となるばかりではない。枯葉を纏まとつて、寒風に曝された裸の木の枝にしんとぶらさがっている様は、子どもにも大人にも飄逸な、そして哀れな印象をあたえるものだ。

糞虫は、秋風が吹く頃になるとチチチチと鳴く、というのには真実だろうか。「糞虫の音を聞きに来よ草の庵」(桃青)の句は、おそらく『枕草子』の記事を踏まえての風雅であつて、糞虫が鳴く、という事実の証明にはならない。芭蕉にはそんなことはどうでもよかつただろう。「俗説に、秋の夜鳴いて曰く、秋風ぞ吹く、父ぞ恋しき、と。然れども未だ鳴く声を聞かず。けだし此の虫、木の葉を以て父と為し、家と為す。秋風既に至れば即ち零落ちりらくし。人之を察し、付会してしか云うのみ。その鳴くは啜すたく声にあらず。乃ち涕泣ていきやくの義なり」と寺嶋良安著『和漢三才図会』にある「原漢文」^⑤。糞虫にとっては木の葉が父であり、家であるが、秋風が吹くようになると、その木の葉が無くなつてしまふ。そこで、「父よ」と「泣く」のだ、実際に声に出して鳴くのではない、との説である。いささか穿ち過ぎのきらいはあるが、この虫が鳴かないことを主張しているのはもつともである。幕末明治初期の随筆『さへづり草松の落葉』にはこうある。「雁の屋の庭上茂りたる樹の中にあたりて、かすけき音あり、草ひばりにもやとひそかにうかがひみるに、馬酔木あしびの小枝にみのむしあり、刃やいばにありてうかがへばさらに声なし、しりぞき去れば又声あり、(中略)その声チチと鳴くがごと聞ゆれば、清少納言が聞けるもこれなるべし」と。これは他の虫の音と取り違えたものか。けれども、尾崎紅葉も、糞虫は鳴く、と信じていたようで、先生の没する二週間ほど前、との弟子泉鏡花の思い出に、紅葉から、庭の糞虫を取つて来い、と言いつかつた挿話がある。そして紅葉は言う。「ゆうべは夜中から、よ

く鳴いて居たよ——ち、ち、——と……秋は寂しいな——よし。其方へやつときな。……殺すなよ」と。文学には生物学とは別の行き方がある。「亀鳴くや亭主は酒にどもりけり」(内田百閒)。養虫が鳴く、と信じている方が雅趣があるようだ。そこで無用の詮索はこれで止めにしておく。

(三)

清少納言にはこの「チチチチ」が「ちちよちちよ」と聴こえたわけだが、これはどういう意味なのか。池田亀鑑は、「養虫の声に、幼児が母を呼ぶ語を響かせたもの。乳や父の意にとるのはどうであろうか」と注釈している。前掲「虫は」の養虫に関するテキスト①の頭注には、「逃げたのが母であれば母を呼ぶ幼児語(現在でも〈ちち〉が母の意である方言がある)、または〈乳〉を重ねた幼児語(ちち)を想定して〈乳よ乳よ〉と解されている。父であれば〈父よ父よ〉であろうが、いずれにせよ養虫の鳴き声をそのように取りなしたものとあつて、三つの解釈が公平に並んでいる。右の一番目の解釈の典拠であろう事項を含む田中重太郎の主張は以下の通り。「鳴き声と母を呼ぶ幼児の語を〈ちち〉と表現したのであらうか。現に右手県九戸郡大野村などでは母親をチチといふらしい。〈ちち〉は父、乳とも考へられる。もし〈乳〉とみるならば、幼児語で〈乳〉を重ねたとみなければならぬ」。テキスト②の校注者渡辺実は、「おにの生みたりければ」を、母親が鬼だから、ということであろう、と解釈している。従つて、捨てた「親」は、人間である父親のことで、「ちち」は、父となる。渡辺はこの話の由来を次のように断じている。「以下の話は全身を養で被つたような姿をしている養虫と、鬼は養を着て姿をかくす(かくれ蓑など)という民話的思考とが結びついて、出来た話にちがいない」と。はて、蓑のように見えるのは人間である父親がくるみこんだ粗末な衣装のはずだが、これが鬼の隠れ蓑を想像させる、というのは妙な連想の飛躍ではある。

森川許六撰『風俗文選』⁽¹⁾にある山口素堂の「蓑虫ノ説」では、「みのむしく、声のおぼつかなきをあはれぶ。ちよく、となくは孝の専らなるものか、いかに伝へて鬼の子なるらん、清女が筆のさがなしや、よし鬼なりと、瞽叟を父として舜あり、汝はむしの舜ならんか（後略）」と儒教的見地に立って蓑虫に大いに同情している。舜がその頑な盲目の父、冷酷な継母、無頼な弟に対し、孝順寛厚、まことに立派な人柄であることを堯帝が知り、これに帝位を禅譲した、という故事を踏まえて、仮に鬼というひどい父親の子でも父を慕って泣くのは孝道の至れるものだから感心、と激賞する素堂は、「ちち」に「父」以外の解釈があるとは思ってもいない。横井也有の俳文集『うづら衣』⁽²⁾「正編続の最後に収められた「百虫譜」には、「きりくすのつゞりさせとは、人のために夜寒をおしへ、藻にすむ虫は我からと、只身の上をなげくらんを、蓑虫の父よと呼ぶは、守宮の妻を思ふには似ず。されど父のみこひて、などかは母をしたはざるらん」と疑問を呈している。私も同様の疑問を持つ。つまり、こうである。私見を述べることが許されるなら、「ちち」はどうしても「母」でなければならぬ、と思う。捨てて逃げたのが男親でも女親でも、幼児が親を呼ぶなら十中八九母親に絶るに違いないし、またそれでこそ読む者の蓑虫へのいとおしさが数段加わるのではあるまいか。ただし、この感覚が一般的かどうか。公正にふるまいたいので、与謝蕪村の句「子鼠のちよと啼や夜半の秋」⁽³⁾を挙げておく。蕪村は子鼠に父母のうちどちらを呼ばせたのか。

さて、「鬼の生みければ」、である。この「鬼」が男性か女性か、という議論があるわけだ。「生む」の主語だから女性に決まっている、とも断じられない、とのこと。前掲蓑虫のテキスト①頭注には更に、「一説、男親（鬼）が生ませた意を当時の言い方で（生む）」といったとある。だから渡辺説「鬼女が子を残して去った」は証明されない。そこでこの件はひとまず措いて、この項でおそらくだれもが疑問とするであろうことを論じよう。作者清少納言の筆は、唐突の感をあたえるほど直ちに核心に入っている。従ってこの記述の背後には何かしら当時周知の伝承が

あつた、と考へうる。私は次の三つの伝承を仮定して見た。そのいずれが最も妥当であらうか。

(1) 鬼が「白面の貴公子などに化けて」人間の女性のもとに通い、子どもを産ませたが、やがて男の正体を知った女が、鬼の失踪後、あるいはこの方がより自然だが、鬼の死後、この子もやがて父親に似て恐ろしい性分を現わすだるう、と、自分の粗末な着物を纏わせて捨てて兇した。

次に仮定される伝承はこうともなるうか。ただし、今度の場合「鬼」は前とは逆に女性である。

(2) 人間の男性が鬼女とも知らず美女と契りを交わして子を産うませしめる。しかし、何かの折、たとえば、その寝姿を垣間見るなどして、妻の正体を知る。悟られたことを推察した鬼女は子を置いて去る。しかし、薄情な男はこの子を捨てる。

第三の、そして最後の仮説は以下の通り。

(3) 叢虫は人間の両親の実子ではなく、鬼の子が紛れて人間に養われ、しばらくしてそのことに気づいた養い親たちが捨て去った。

右の仮説は最も突飛であり、私の知る限りの日本の伝承には馴染まないが、考へる所あつてわざと挙げておく。では これらの仮説を比較口承文芸論の見地から順次吟味してみよう。

(四)

仮説(1)

鬼が「白面の貴公子などに化けて」人間の女性のもとに通い、子どもを産ませたが、やがて男の正体を知った女が、鬼の失踪後、あるいはこの方がより自然だが、鬼の死後、この子もやがて父親に似て恐ろしい性分を現わすだるう、

と、自分の粗末な着物を纏わせて捨て児した。

超自然的存在や動物など異類の男性と人間の女性との交渉は、遙か昔から汎世界的に民間伝承の主題として好んで語られて来た。神と人間の女性との通婚では、白鳥とレダ、牡牛とエウロペ、黄金の雨とダナエといった具合に、ギリシヤ神話で大神ゼウスが勇名を馳せているが、同工異曲の話は丹塗りの矢に姿を変えて美しい乙女に近づいた大物主おむすめ神の話が『古事記』にある。ローマ文学の傑作アプレイウスの『黄金の驢馬』と通称される『変身譚』の挿話「アーモルとプシユケ」型の話は、ヨーロッパ、特に西欧に広く伝播している。しようことなしに恐ろしい怪物（美は美しい愛神クピド（エロス）。姿は見せない）と結婚した乙女が、予想に反してこの上も無く愉しい生活を送る。しかしやがて、灯火をともして夫の姿を見てはいけぬなどの夫との約束を破ったため、夫を失う。行方知れない夫を取り戻すため、長いこと艱難辛苦の旅を重ね、夫の母であるウエヌス（アプロディーテ）の元に行き着き、女神から烈しい侮辱と虐待を加えられ、三つの難題を課される。二つは果たすことができたが、三つ目であやうく失敗するところを夫エロスに助けられ、ユピテル（ゼウス）の執り成しを受けて再び喜びの暮らしに入る。これが前記挿話の粗筋である。魔法によって呪われて鷹、鹿、海豚の姿に変えられた男性と幸福な結婚を送る話（ジャンバツティスタ・バジレ『ペンタメローネ（五日物語）』四日目第三話「動物にされた三人の王様」¹⁴）、同じく熊、鷲、海豚にされている三兄弟と彼らに連れ添う美しい三姉妹、そして魔法を打ち破る旅に出てこれに成功するその末弟の物語（ヨハン・カール・アウグスト・ムゼーウス『ドイツ人の民話』第一部第一話「三姉妹年代記」¹⁵）は、こうした民間の口伝えを素材とした「本になった昔話」Buchmärchenである。日本では、明神様ないし水神様の申し子としてある夫婦の間に田螺たにの姿で生まれた男の子「異常出生という点では「一寸法師」と同じく、これは呪われているのではなく、

通常の人身を備えるまでの一種の研修期間と思われる」と結婚した娘が誠実な愛情を貫いたお蔭で、田螺は立派な人間の若者になる民話「田螺息子」⁽¹⁶⁾が、これらに対応するとまでは言えなくとも一脈相通じるものを持っている。

しかし、「アーモルとプシユケ」型の諸諸のモチーフに、結末を除けば後は完全に対応するのが、「御伽草子」にある「天稚彦物語」である。十五世紀の古い絵巻の詞書に基づいた「天稚彦草子」⁽¹⁷⁾のテキストによって粗筋を述べる。ある長者夫妻に三人の娘がある。大蛇がそのうちの一人を妻に求める。よこさなければ夫妻を殺す、と言うのである。夫妻は嘆き悲しんで、まず長女に頼む。長女は、死んでもいやです、と断る。次女も同じ。夫妻が一番可愛がっていた三女は、父母の命には代えがたいので、自分が大蛇の妻になる、と承諾する。夫妻は大蛇の指示通り、ある池のほとりに十七間もある大きな家を建て、ここに末娘を置いて去る。

十七間の家が一杯になるほどの大蛇が出現。娘に向かって、「怖がるのでは無い。もし刀を持っていたら、私の頭を切り落としなさい（われを恐ろしと思ふことなかれ。もし刀や持ちたる。わが頭斬れ）」と告げる。娘が爪切り用の小刀で斬ると簡単に斬れ、中から直衣〔公家の平常服〕を着た絶世の美男子が出て来る。唐櫃〔四方に脚の付いた大型の箱。衣類や調度品を収納する〕に入って共寝をする。二人は愛し合って、このうえなく楽しい暮らしを送る。欲しい物は何でもこの唐櫃から取り出せる。従者たちもたくさんいる。やがて男はしばらく家を留守にする、と告げる。「自分は海龍王〔龍宮の王〕だが、空にも行くことがある」と素性をも明かす。七日から二十一日で帰るが、それでも帰らなければ、永久に帰って来ない、と思え、と。娘が、そんなことになったらどうしましょう、と訊くと、「西の京〔平安京の中央、朱雀大路の西の部分。右京〕に一夜ひさご〔一夜で天まで伸びる瓢箪なし夕顔〕という物を持っている女がいるから、これに報酬をあたえて、その蔓に縋って天まで昇れ。昇れたら、道で逢う者に、天稚御子のいらっしやる所はどこか、と尋ねよ」との返事。それから、「望みの品が出て来る唐櫃は決して開いてはなら

ない。もし開けたら、もうそれだけで、私は帰って来られないよ（この物入りたる唐櫃をば、あなかしこ、いかなりとも開くな、これだに開けなば、え帰り来まじきぞ）」と禁じて、空に昇る。

やがて姉たちが訪問。妹が楽しく暮らしているので（心中妹が妬ましくてたまらず）、「私たち、巡り合わせがわるくて、あの時怖がつてしまったのね（われら果報の悪くて、恐ろしとも思ひけるぞ）」、と言いながら、色色開けにかかる。そして例の唐櫃も、開けろ、とせがむ。鍵がどこにあるか分からない、と妹が拒むと、その体をくすぐつて、袴の腰に結び付けてあるのを発見、あつさり開けてしまふ。中には何も無く、煙が空に立ち昇る。姉たちは帰つてしまふ。

娘は二十一日待ち続けたが、夫が帰つて来ないので、西の京へ行き、一夜ひさごを手に入れて空に昇る。空でさまざまの星に夫の居場所を訊き、最後に瑠璃を敷き詰めた土地に建つ玉で飾つた御殿に住む夫に巡り合う。二人は愛の言葉を交わすが、天稚彦は、実は自分の父は鬼だから、あなたがいると知ればどんな仕打ちをするか、心配だ、と打ち明ける。やがて、何日か経つと父の鬼がしばしば来るようになる。天稚彦はそのたびに妻を脇息きょうぞくとか、扇、枕に変身させて、父の目を逃れるが、とうとう見つかつてしまふ。鬼は、「それではおれの嫁ではないか。召し使う者もおらぬから、もらつて行つて用事をさせよう（さてはわが嫁にこそ。使ふ者も侍らぬに、賜はりて使はん）」と言つて、連れて行く。

舅である鬼は、嫁に次に難題を出す。まず、千頭の牛を朝は野に放牧し、夕べに牧舎へもどすこと。女は夫に相談、その袖をもらつて、これを「天稚御子の袖々」と唱えて振ると、千頭の牛が思い通りになる。次は、ある倉にある米千石を別の倉に移し換えること。一粒も落としてはならないのである。唱えごとをすると、蟻がたくさん出て来て、さつと運んでくれる。次は、一尺余りの百足ひかかが四五千いる倉に七日間閉じ込められる。唱えごとをすると傍に寄

らない。最後は蛇のいる倉。これも同様にして凌ぐ。

舅の鬼は諦めて、嫁が息子に逢うのを許すことにする。しかし、月に一度、と言う。しかし、女は聞き損って、年に一度とおっしゃいますか、と問い返してしまふ。すると鬼は、「お前がそう言うなら年に一度だ（さらば年に一度ぞ）」と、瓜（瓜か菰）を投げつけると、「そこからさつと水が流れ出て」天の川になり、二人は中を隔てられた。これが七夕の始まり、つまり、織姫（織女星）と彦星（牽牛星）が年に一度七月七日に逢う起源である。

けれども、右のような物語では、異類の男性が夫であつても、幸せな、あるいは、少なくとも惨めでは無い契りだから、私が仮説(1)とする口承とは根本的に異なる。

異類相手に父親がした約束を履行するため、あるいは、異類から父親の命を救うため、異類の男性に嫁入りするが、詭計を設けて相手を滅ぼしてしまふ乙女の話——いわゆる「蛇婿入り」・「猿婿入り」・「鬼婿入り」型の民話——が日本では広く、また古くから語られていて、表面的には私の仮説(1)にむしろ近い。ただし、この型の民話では普通、婚姻は実際には行われず、従つて子どもも生まれないので、その場合は残念ながら本質が異なる。

しかし、子どもができる話もある。¹⁸⁾これは蛇が美しい男に化けて妻問いに来るといふもの。男がどこへ帰るのか不審に思った女が、糸を通した針を男の着物の裾に刺して置き、後朝の別れののち、糸を標（しるべ）につけると、体に突き刺された鉄の気のため息も絶え絶えの蛇の穴に達する。夫の正体が顯われた後、妻は腹の子（夥しい子蛇）を拒否し、これらを始末する。また、奈良時代の僧景戒録『日本国現報善惡靈異記』、すなわち『日本靈異記』中巻第四十一「女人、大蛇に婚はれ、薬の力に頼りて、命を全くすることを得る縁」、『今昔物語集』巻二十四第九「蛇にとつげる女を医師のなほせる語」では、蛇に魅入られた人間の女性は孕んでいる。『今昔物語集』巻第三十一第十五「北山の犬、人を妻とせし語」は、大きな白犬に攫われてこれを夫とし「文中「犬も内へ入りて女と臥すめり」とあ

る〕、北山に侘び住まいする京育ちの若い美女の話である。子どもはできていないが、その後生まれても不思議は無い。¹⁹この辺の話型があるいは仮説(2)の僅かな補強になろうか。

人間の女性が、異類なるが故に相手を厭わしく思う例はヨーロッパにもある。ドイツ語圏の伝説の場合、それはたとえば男の水の精 Wassermann, Nickel, Nix に攫われて妻とされた娘の話に見出される。フリードリヒ・ド・ラ・モット・フーケの『ウンディーネ』や、エドゥアルト・メーリケの『麗しきラウの物語』、ヘルマン・ヘッセの『人魚』、オスカー・ワイルドの『漁師とその魂』、ハンス・クリスティアン・アンデルセンの『人魚姫』のように、民間伝承を下敷きとした文学を読むとはつきり分かるように、女の水の精は一般通念として——性格はともあれ——容姿は端麗だが、男の水の精は『ウンディーネ』においても、ゲルハルト・ハウプトマンの『沈鐘』においても醜い存在である。²⁰ぬらぬらの水草、水に沈んだ木の根、冷たい泥土、蛙や水蛇、といったイメージに繋がるからさうだ。怠け者で虚栄心の強い、意地悪な少女が、水辺で豎琴を弾く美しい少年と接吻するうち、変身した相手に水中に引き込まれて、劫を経た醜怪な水の精の妻にされる短い絵物語を、ヴィルヘルム・ブッシュが描いている。²¹ブッシュは、十九世紀後半、ドイツのスケッチ画家、漫画家、作家として一世を風靡した人物。

この絵に付けられた詩の最後の節はこうである。

さてそれからというものは、

傍にはうごめく水鼠、

搔かねばならぬ禿頭、



Da sitzt sie nun bei Wasserratten,
Muß Wassernickels Glatze kratzen,
Trägt einen Rock von rauhen Binsen,
Kriegt jeden Mittag Wasserlinsen;
Und wenn sie etwa trinken muß,
Ist Wasser da im Überfluß.

昼の御飯は浮き草で、

咽喉の渴きを鎮めるは、

汲めど尽させぬ水なりき。

彼ら、男の水の精は人喰いでもある。水の精の人間の妻が出産する時、産褥に呼ばれた産婆は、せっかく生まれた赤ん坊も夫が食べてしまうのです、と産婦が泣いて打ち明けるのを聴くのである。「私はあなたと同じクリスチャンの人間なのですが、かどわかされて来たのです。水の精が私を取り替えたのです。こうして赤ちゃんを生みましても、いつも三日目にはあれが取り上げて食べてしまうのです。三日目にお池にいらつしゃいな。そうすればお池の水が血に変わるのをごらんになることでしょう」(グリム『ドイツ伝説集』四十九番「男の水の精」)。²²⁾「取り替えた」というのは、この女性が赤児の時、母親の隙を狙って、水の子と掬り換えた、ということである。この民間信仰についてはこの稿ではのちに簡単に述べるに留める。

(五)

次は仮説(2)の吟味に移る。

人間の男性が鬼女とも知らず美女と契りを交わして子を^な生さしめる。しかし、何かの折、たとえば、その寝姿を垣間見るなどして、妻の正体を知る。悟られたことを推察した鬼女は子を置いて去る。しかし、薄情な男はこの子を捨てる。

人間の男性が、超自然的存在、あるいは異類の女性と結ばれて、子を設けたという話もちろん枚挙に暇がない。超自然界から来た妻、ないし動物の妻の代表はいわゆる「白鳥乙女」である。男が水浴している娘の羽衣（飛翔するのに必要な道具）を奪い、娘と結婚する。すぐ羽衣を返却する場合には、男は妻に彼女の父のもとに伴われて行き、様様の難題を課されるが、妻の援助でこれを解決する。ここから魔術的逃走譚 *Magische Flucht* に結びつくこともあるが、いずれにせよ、男と妻は添い遂げることが多い。男が羽衣を匿しておいた場合、夫の留守中に羽衣を発見した妻がそれを纏って故郷である超自然界へ帰ってしまったので、あとから男が恋い慕って行く、というものもある。これは「失踪した女房を探す男」という話型 AT 四〇〇 に分類される。つまり、日本の「鶴女房」や「信田狐」のように、夫がいなくなった妻を慕って探しに行くことがない、いなくなつて終わり、という物語はヨーロッパの口承文芸研究者から見ると、奇妙なのである。なお、「白鳥乙女」は別の小論で詳述するので、ここではざっと触れて置く。この女房探しのモチーフを素材として興味津津たる物語に仕立て上げたものとしては、グリム兄弟の先駆者の一人、十八世紀の文人 J・K・A・ムゼーウスの「奪われた面纱」⁽²⁴⁾ や、中近東の一大説話集大成『千夜一夜物語』の「パソソラーのハッサン」⁽²⁵⁾ がある。日本の羽衣伝説はいうまでもなくその一環を形成するもの。「駿河国風土記」(ただし逸文)の説話によれば、三保の松原(有度浜)に降り立った神女が脱ぎ捨てた羽衣を見つけた漁師が、相手が懇願するにもかかわらず返さず、神女はせんかたなくこれと夫婦になるが、その後羽衣を取りもどし、雲に乗って去つた、とある。風土記では他に『近江国風土記』(逸文)の「伊香の郡の大江」の説話もこれに似ている。この種の日本の民話は「天人女房型」という名称で分類されている。ステイス・トンプソンの『民間説話』には、「女房が鳥になつて夫の留守に去るが夫に謎の言葉を残して自分の居所を解かせる、という形になっているものもある」と記されている。たとえば、パウエル・ツァウネルト編『グリム以降のドイツ昔話』十一番「獵師と白鳥乙女」⁽²⁶⁾ では、白鳥乙女

が夫の母に向かつてこう言つて飛び立つ。

「母様。私にまた逢いたいという人はガラスのお山に来なくてはなりません。そのお山は広いひろい原っぱにあるのです。私は魔法にかけられた王女で、そこへもどらなければいけないのです。いとしいだんな様とかわいい子どもたちによるしく言つてくださいます。それではご機嫌よろしゅう。」⁽²³⁾

「信田妻」として説教節や、浄瑠璃・歌舞伎の「芦屋道満大内鑑」で有名な狐女房が、人間の男〔安倍保名〕との間に設けた子〔安倍晴明〕に本性を見られて去る際、泣く泣く鏡文字で障子に書く「恋しくば尋ね来てみよ和泉なる信田森の恨葛葉」はこれと符節を合わせている。

近世ヨーロッパのメルヒェンの場合、動物あるいは植物の姿で人間の男性に接近し、やがてはこれと結婚する女性、魔法にかけられているか、自ら魔法で変身しているかで、元来は人間であることが多い。『グリム兄弟の家庭と子どものための昔話集』Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm (KHM) でこれに該当する話は、KHM 六十三「三枚の羽」Die drei Federn、KHM 一〇六「哀れな粉挽きの若い衆と小猫」Der arme Müllerbursch und das Käzchen、KHM 一六〇「謎々話」Die Rätselmärchen の三話か。もともと「三枚の羽」では、地下の国に棲む蟪蛙姿の一族の中の小さい蛙が抜け作王子のお嫁になるが、これはもしかすると、本物の蛙が美女に化けたのかも知れない。インドには蛙の王女が美姫に変身、通りかかった王をたぶらかしてこれの妃に納まるが、王は妃の素性を知つても幸せである、という物語があるから。⁽³⁰⁾ こうしたオリエントの物語がヨーロッパに流入した可能性は否定できない。しかし、狩猟・漁労によつて生活する人人であればヨーロッパ人であっても、動物の女性と人間の男性の通婚は不自然とは考えられなかった。北欧やスコットランドでは「海豹乙女」も少なくない。また、北極圏に住むイヌイットのの間では「鴨乙女」が語られている。S・トンブソンは動物女房と動物婿について、北米先住民やイヌイットの数数の

民話を挙げ、「世界各地の未開民族の話にあつては、人間が実際の動物と結婚するといった例は枚挙に暇がない。ら
いである」と述べている。³¹けれども、人間と動物との間にはつきりと隔てを設けるキリスト教の教義に基づかない宗
教観を持つなら、未開民族ならずともこの種の話の例が夥しく見られることはここで断るまでもない。ただ、この場
合でも、動物婿には禁忌感が働き、動物女房はむしろ歓迎すべき存在とされている、と大雑把に概観される。

さて前記葛葉狐は良妻賢母である上、女の性の哀しさを具現して私たちの同情を集めるが、この種のいとoshい女
性が日本の異類女房のほとんどを占めていることは、指摘しておくだけの価値があると思う。上は木下順二の民話劇
で有名な美しいおつう（「鶴の恩返し」という本来の民話では、鶴は女房になるのではないが）から、下はいささか
汚い蛤女房に至るまで、異類の妻は人間の夫にとつて甲斐甲斐しい世話女房であり、かつ、愛らしさを失わない。本
来人間の生命を冷酷に奪つてのけるはずの雪女でさえ、何年か睦まじく暮らしたあとでは禁忌を破つた夫を約束通り
取り殺すことができずに去るのである。これまた恐ろしいはずの龍や蛇も、人間の妻となつてからは、夫や子どもに
危害を加えることは決して無い。

中国ではどうか。人間の女性に化けた狐の本領は、かの国の伝奇小説である明末の人馮夢龍増補の四十回本『北
宋三遂平妖伝』³²に登場する小狐胡媚兒の艶っぽい挿話（第十五回）でも大いに發揮されているが、とりわけおもしろ
いのは清の蒲松齡著わすところの『聊齋志異』³³に収められた種種の物語である。これらで活躍する胡氏（狐は人間
に化ける時音の共通する胡を姓として名乗るのがお約束）の美人の中には文字通り狐媚をふりまくだけの軽佻な連中
ももとより少なくないが、なまじつかかな人間以上に男に尽くす例も二三に留まらない。「狐夢」、「青鳳」、「青梅」、
「胡四姐」、「荷花三娘子」などなど。また、明代の擬話本『三言二拍』³⁴百九十八編のうち第一の傑作とされる『警世
通言』第二十八卷「白娘子永鎮雷峰塔（白娘子永に雷峰塔に鎮まる）」の女主人公白夫人（白蛇の精）は美青年の許

宣を見初め、術を用いてこれと夫婦になるが、ひたすら夫を大切にしている。結びで法海禪師なる僧侶が白夫人と侍女の青青（青魚の精。従順で可愛らしい）を鉢の内に呪封してしまい、許宣は出家するが、私には余計なおせっかひとは思えない。この作品は「或いは馮夢龍の創作かも知れない」とのこと。

ただし、中国でも「虎乙女」となると話はいくらか別である。唐代の『原化記』、『河東記』、『集異記』（原典は全て湮滅しているので、宋代に編まれた『太平廣記』に拠る）には、虎が皮衣を脱ぎ捨てて美女となったのを、人間の男が娶り、子どもも儲けるが、その後ある折に昔日の虎皮を纏った妻は、猛虎に還って自然界にもどって行く。ここまではよい。「白鳥乙女」と同工異曲である。しかし、『集異記』では虎身となった女は、夫と息子を喰い殺してしまう。『原化記』と『河東記』では夫、子どもたちは無事なので、私としては類型としてこちらのみを探りたいのはやまやまなのだが。

『原化記』に出る「天寶選人」は、男が、眠っている乙女から虎の皮衣を奪って隠してしまい、乙女を無理やり妻にするところ、妻は、子どもが何人もできてから、皮衣を着て元の姿にもどり、どこかへ去ってしまうところ、まさに「白鳥乙女」型なのである。
全編を意識すればこうもあろうか。

天寶の科挙受験生

唐の天寶年中、科挙（官吏登用試験）を受験しようとする都長安に旅する者があった。途中日が暮れ、ある村の仏寺を訪ねて宿を求めたが、折悪しく僧侶が居合わさない。しかしもう真っ暗になってしまい、他の家に行くこともできない。そこで寝台に横になって仮寝をした。鞍置き馬は別室に入れた。夜明けがた出発しようとしたが、たまたま僧院

内を歩き回つてみたところ、寺の背後にあら家があり、そこに一人の女がいるのに気づいた。年の頃は十七八で、すこぶる美人。虎の皮をかぶつて深く熟睡している。「恐らく全裸で寝ていたのであろう」。男はこっそり近づいて、虎の皮を奪い、これを匿した。乙女は目を覚まし、大層驚き恐れた。男は乙女を妻にしてしまい、どうしてこんな所に居るのか訊くと、難を逃れてここまでまいりまして、ひっそり隠れております、生家はずっと遠方なのです、と言う。男は乗り換え馬に女を乗せ、科挙受験に赴いた。受験は成功、牧民ぼくみんに携わる地方官に任用された。数年して任期が満了したが、息子が数人できていた。一家うち連れて旅のある日、再び以前宿った寺院に來た。今度は僧侶が居て、受け入れてくれたので、ここに宿つた。翌日これから出発という時に、男は笑いながら妻にこう言つた。私とそなたが初めて逢つたのはここだが、憶えていないのかね、と。すると妻は怒つて応えた。あたくしは元來人間じゃないのよ。たまたまあなたのものにされてしまつたに過ぎません。息子が何人もできたので、嫌われてはいけなないと、しばらく一緒に居ただけですわ。今辱められたのは、ただ言葉の上だけではありません。あたくしにあの時の衣服を返してください。行きたいところに行きますから、と。男は、言い過ぎた、とひたすら謝つたが、妻の怒りは一向収まらず、ますます激しくもとの衣服の返却を言い募つた。男は、これはどうしても止められないようだ、と考へて、こう言つた。そなたの衣服は北の建物にある、自分で行つて、取つて来るがよからう、と。女は大いに怒り、目はざらざらと電光のように輝き、猛り狂つて北の建物に入り、虎の皮を探し出すと、これを体に纏つた。そして跳躍すること数歩で、巨大な虎になつたのである。咆哮ほうぼうしてちらりと振り返り、林を目指して行つてしまつた。男は驚き恐れて息子たちを連れて立ち去つた。³⁷

最後に「振り返つた」のは、数年連れ添つた男と腹を痛めた子どもたちとに今生こんじょうの名残を惜しんだのだらう。

これは「誇りを傷つけられた異類の妻」の話である。日本の「信田妻」ももとよりその一つに入る。S・トンプソンは、北アメリカ大草原地帯の先住民諸部族に限定されている、として、民話「誇りを傷つけられた野牛女房」を紹介している。

ある男が雌の野牛と結婚する。野牛は人間の女になって子を生む。男には人間の妻もいたが、その妻が野牛の妻の身元を口に出している。あるいは他のやり方で彼女を怒らす。野牛の妻とその子は野牛の姿に戻り仲間のところに帰る。夫は二人を探しに行く。野牛の長老は野牛の群のなから二人を選び出せば二人を男のもとに帰してやろうという。野牛の子どもが合図の方法を前もって教えてくれたため無事二人を選び出して連れて帰る。³⁸

『河東記』にある「申屠澄」〔申屠は複姓〕⁽³⁹⁾の話は文人の筆が濃密に入っており、民話の素朴単純から遠く離れている。勿論これはこれで一編の小説として極めておもしろいものではあるが、ここで詳しく紹介すると文学論になってしまうので、他日に譲らざるを得ない。舞台はやはり唐代、それも発端は貞元九年とある。澄が乙女から虎の皮を奪うエピソードは無い。県尉けんじょうとして任地に赴任する途中、風雪に行き暮れて一夜の宿を頼んだ一家、老夫婦と十四五の娘に歓待され、娘の美しき、挙措きよその完璧さ、知性の高さに驚嘆して、婚姻をその両親に申し込むのだから、いよいよもって民話的ではない。新妻は才色兼備、家政に巧みで、しかも夫との交情はまことに細やか、親類縁者への執り成しも行き届き、召使一同からも慕われる。一男一女に恵まれ、この子どもたちはいずれも「甚明慧」という具合。ただ、最後の別れはあっさりとしているので記しておこう。

やがて官を辞して故郷に帰ろうとした澄一家は、旅の途中妻がかつてその両親とともに住んでいた家、つまり二人

が初めて相い逢うた家に着く。しかし無人である。澄と妻はその茅屋に留まる。妻は物思いに耽つて、終日涙を流している。

その後から結末まで意識して見る。

壁の一角に掛かっている古着の下から一枚の虎の皮が覗き見えた。埃が一杯積もっている。妻はこれを見ると大笑いして言った。まあ、まだこれがあるなんて知らなかったわ、と。そして皮をはおるやいなや、変身して虎になり、咆哮してがりがりとあがき、門に突進していなくなつた。澄はびっくりして逃げ走つたが、やがて二人の子どもを連れて、妻の行つた道を探り尋ね、数日の間林に向かつて大いに哭いた。けれども妻の行方はとうとう分からなかつた。

この「虎の皮」のことは実は前に出ない。この点物語を編んだ文人としては、用意が足りない。

『集異記』にある「崔韜」では、虎の方から自薦して士人の妻になる。

崔韜という男が遊歴の途次、仁義という駅通の駅館に泊まる。駅の吏員はこの館には忌まわしい評判が立っているから、泊まらない方がよろしゅうございませう、と制止するが、崔韜は聴かない。夜中になつて就寝準備をしていると、虎が門内に闖入、庭で皮を脱ぎ捨てる。珍しいほどの美人で装身具をきちんと付けており〔奇麗嚴飾〕、男の衾にもぐりこむ。寝台から逃げ出して暗いところに隠れていた崔韜が出て来て、おまえが獣なのを目撃した、なぜ入つて来たのか、と詰問すると、女は起立して説くのである。父兄は獵師が稼業〔これで娘の自分が虎の皮の外被を纏つ

ていた説明にしているわけ」でございます。でも貧しくて、私は良縁を得られません。そこで君子〔立派な方〕が泊りになるたびに、この身をお任せして妻としてお世話したい、と参上したのですが、これまでの旅人は、皆さん、怖がって命を落とされました。今日は幸いに偉いお方にめぐり合えましたわ、と。崔韜は承知し、虎の皮を馱館の裏の酒井井戸に投げ込み、女を連れてそこを後にした。やがて崔韜は明経科〔唐代科挙の科目の一つ〕に合格、役人として赴任することになり、妻と息子を伴い、任地への旅に出る。やがて仁義の馱に到着して泊まる。

さてここからである。意識を試みる。

韜は笑って、この馱館はそなたと初めて会った場所だよ、と告げ、行って井戸の中を覗くと、獣の皮衣かわころもがそっくりそのまま有って昔通りだった。韜はまた笑って妻と息子に向かってこう語った。以前そなたが着ていた皮衣がまだちゃんと有ったよ、と。妻いわく。だれかに取り出させましようよ、と。皮が手に入った。妻は笑って韜に向かつて言う。あたくし、試しにもう一度着てみますわ、と。衣に近づいて手に持ち、庁〔表座敷〕から庭へと階段を下りた。皮衣を取って身に纏う。着し終ったかと思うと、ただちに虎に変身、跳躍し、蹠うづまり咆哮した。そしてぱっと庁に飛び上がると、息子と韜を喰って姿を消した。¹⁰⁾

これは民話の類型から隔たること、「申屠澄」より甚だしい。自薦はかなりおかしいのである。しかし、中国の狐や鬼ゆうれいの美女はしばしば自分から知識階級の青年に近づいて、これと情を交わすから、あるいはこの虎乙女もそれに倣ったのかも知れないが、皮衣を脱いだ状態で「蔽飾」もおかしい。裸体、あるいは、それに近い格好のはず。夫と息子を食ってしまうのはもつとおかしい。

こういう逸脱・例外があるにせよ、おおむね異類の妻は情緒纏綿、人間の男と琴瑟相和し、遂に去るに及んでも、夫は妻を慕って止まず、二人の間に生まれた子どもは（大抵できのよいこともあつて）父の元で成長する。捨てる、ということとは無い。かの高名な陰陽師安部晴明をめぐる伝説（「江戸時代初期に成立か」）では、彼が狐を母としているから常人には及びもつかぬ通力の所有者なのだ、と説明される点が肝要なのである。

従つて、人間の夫が異類の女房を厭わしく思い、女房が去つたあと、仲に生じた子どもを捨てる、という仮説②も、類話を比較考究すると、どうも不自然なようである。

（六）

では、第三の、そして最後の仮説はどうか。

藁虫は人間の両親の実子ではなく、鬼の子が紛れて人間に養われ、しばらくしてそのことに気づいた養い親たちが捨て去つた。

先にも記したように、右の仮説は最も突飛である。ただし、私はことさらに奇を衒つてこのような説を立てたわけではない。生まれた子が、日数を経るうちに、両親のいずれにも似ない外貌、異常な行為が目立つようになったとすれば、本当の子でない、鬼の子だ、本当の我が子が鬼の子と掬り替えられたのだ、と思ひなしてしまおうとすることは無かつたであらうか。「親に似ぬ子は鬼の子」という諺的慣用句はどこから出たのか。

ここで私が仄めかしたのは、言うまでもなく、古くからヨーロッパに広がっている「取替え子」Changeling, We-chselbalg という民間信仰である。魔物、こびと、妖精が、人間の子どもを欲しがって、揺り籠の中の新生児をひそ

かに攫い、代わりに自分たちの一族を置いて行く。この存在は最初のうちこそ親に気づかれないが、だんだん健全な子どもではないことを示し始める。多くは頭が大きく、口を利かない、歩行ができない、ただ泣き喚くのみで、食欲のみ妙に旺盛、などなど。メルヒエンでは、有能な助言者である「賢い女」*Wise Frau* や老人などの指図で、その子どもに年齢を白状させてしまう。こうして妖魔である素性が露見すると、眷属がやって来て、間拔けな仲間を連れ去り、代わりに本物の人間の児を揺り籠に返す（グリム兄弟編『子どもと家庭のためのメルヒエン集』第三十九番「こびとたち 第三話」）。⁽⁴³⁾めでたし、めでたし、なのだが、伝説では様変わりする。取替え子であることを見抜いただれかの強い忠告で、親はその子を深い淵に投げ込む。すると、取替え子はいなくなる。親が家に帰ると、本当の我が子が新しい揺り籠の中で健やかに笑っていた（グリム兄弟編『ドイツ伝説集』第八十二番「取替え子」）。⁽⁴⁴⁾そう、これならよいが、家に帰っても、本物がもどっているのかいないのか、言及されていない場合もある（前掲書第八十三番「水の中の取替え子」）。⁽⁴⁵⁾

ただし、日本および中国では、このような症例の子どもの場合、次に挙げる解釈の方が一般的である。輪廻転生思想に基づく説話となる。これと平行して、あるいは先行して、日本土着の「鬼っ子」伝承があったのか、なんとも分からない。存在したのなら、それこそ蓑虫伝説の源なのだ、というまことに微弱な提言を行なって、更に四つの説話に簡単に言及し、この稿を終える。ヨーロッパの「取替え子」伝説・民話とこれらの説話については他で詳述する。「日本霊異記」にある「行基大徳、子を携ふる女人に過去の怨を視して、淵に投げしめ、異表を示す縁第三十」ではこうである。

聖僧行基が説法をしていると、十数歳の子を連れた女性が聴聞に来る。この子は「その脚步まず。哭き謹め、乳を

飲み、物を噉ふこと問無し」なのである。行基は「そなたの子を外に連れ出して、淵に捨てなさい」と告げる。女性がとうとうその通りにすると、子どもは水上に浮き出て、悔しそうに言う。「ええ、恨めしい。もう三年の間食い倒してやろう、と思っていたのに」と。母親が事の由を行基に告げると、行基はこう説明する。「そなたは、前世であれから物を借りながら、それを返済しなかつたので、あれは現世で子どもになって生まれて、負債分をそなたから食いはたつておつたのだ。あれは前世の債権者なのだよ」と。⁽⁴⁶⁾

次は、全く右に準拠した物語で、江戸時代のもの。「善悪報ばなし」の巻一の一「前世にて、人の物をかり取り、返さざる報により、子と生まれ来て取り返る事」である。

四十過ぎになつてようやく息子ができた夫婦。しかし、二十一歳になつても腰が立たないで、いざり歩きをするのみ。ある時、夫婦が嘆くと、息子が、願いを叶えてくれれば、立つてみせましょう、と言う。両親が喜んで、その願いを早く言え、と答えると、「それなら米一俵、錢三貫文ください」と言葉。それを置くと、腰が立たないはずの息子が、座つたまま米俵を肩に担ぎ、錢をひつつかんで立ち上がり、山中へ走つてゆく。親が後を追うと、途中で身の丈一丈余りの鬼となり、こう告げる。「きさまに前世で錢や米を貸してやつたが、とうとう返済し居らずじまい。これを取り立てるため、きさまの子に生まれて、二十一まできさまの物を喰ひ尽くしたのだ。その余りがこの米と錢だ。今、これを取つて帰る。さつさとどれ」と。⁽⁴⁷⁾

以下に掲げるのは清代の蒲松齡著『聊齋志異』の「柳氏子」〔柳氏の子〕⁽⁴⁸⁾の一部である。

四十余りになってから息子ができた小役人柳は、これを大層可愛がつて、なんでも言うことを聞いてやった。息子は大きくなっても金遣いが荒く、父親である柳の蓄えは遂に底を突く。ある時息子は病氣になり、やがて死んでしまう。その後しばらくして、村の人たちが泰山に参詣に赴いたところ、息子に出会う。村人たちが宿で、お父上（尊大人）が毎日想っているから、一度帰省したら、と言う。息子はさつと表情を変える。そして、そんなに想っているなら、四月七日にここで待つ、と伝言してくれ、と応える。

柳は日限通りにその宿に到着。宿の主人は、逢わない方がよい、と止め、長櫃の中に隠れていて、息子さんの様子がよければ、出て来てお逢いになったら、と勧める。息子は約束通りにやって来る。そして、柳某は来たか、と訊ねる。いらしていません、と言われると「あん畜生め、どうして来やがらぬ」と罵る。そして、「あれは、昔兄弟分の約束をして、一緒に旅商人をやった相手だ。思いがけなくも、悪い根性を持つて居くさつて、おれの血の出るような金を隠して、どうしても返そうとしやがらなかった。今とつ捕まえて好きなようにしてやろうとしたのに」と言い終わり、門を出て行く。

けだし、前世で奪われた財貨を償わせ、最後には仇を討とう、と怨む相手の一子に生まれ変わり、その財産を蕩尽させて死に、それから更に、鬼になって取り殺そうとした男の話である。

明代短編小説集『今古奇観』第十話「看財奴刁買冤家主」の枕の部分に、金持ちの金を盗んだ男がその長男に生まれ変わって財産を大きく増やし、金持ちの妻に金を横領された僧侶がその次男に生まれ変わって金を湯水のように費やす、という話がある。これもまた右と趣旨が同じである。

- (1) 白田甚五郎・新聞進一・外村南都子・徳江元正校注「神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集」
- (2) 日本古典文学大辞典編集委員会「日本古典文学大辞典」の記事に拠る。「体源抄」所収「風俗歌拾遺」にある「うばらこぎ」なる歌とのこと。平安時代の風俗歌の一つ。
- (3) 松尾聡・永井和子校注・訳 日本古典文学全集十一「枕草子」
- (4) 渡辺実校注「枕草子」新日本古典文学大系一十五
- (5) 卷五十三「化生類」蓑衣虫。(前略) 俗説秋夜鳴曰秋風吹兮父恋焉然未聞鳴声蓋此虫以木葉為父為家秋風既至即遷零落矣人察之付会云爾耳其鳴者非啜声乃涕泣之義(後略)。
- (6) 加藤省庵「さへつり草」明治三年成立。翻刻本は室町岩雄編(明治四十三―四十五年)があるが未完。
- (7) 泉鏡花「湯どうふ」鏡花全集卷一十七
- (8) 池田亀鑑「全講枕草子」
- (9) 田中重太郎校注「枕草子」
- (10) 北欧伝説によれば、神神に殺された太古の巨人ユミールの腐肉から夥しい小さな生き物が二種類発生、神神はこれを哀れんだ。光のこびと(白こびと)は美しく、明らかで、正直だったので、空にその国を造って住まわせた。しかし、浅黒いこびと(黒こびと)は醜く、陰気で、ずるがしこかったので、地下の国に追いやった。そして、陽光のあるうちは地上を徘徊するな、と厳命。さもないと石に化する、との運命を定めた。尤も、霧の帽子 Nebelkappe、隠れ頭巾 Tarnkappe と呼ばれる(「先の尖った」)被り物を頭に載せていけば、日に当たっても石にはならず、人間の目にも見えないのである。
身に着けると姿が見えなくなる、というこうした道具は、日本でこそ鬼や天狗の宝とされているが、世界的には人間も用いる。隠れ蓑という言葉は「日本の文献には平安中期から見られ、仏教説話から移入された。(中略)これによって身を隠してどうこうしたという話は、仏教説話集以外の文献にはほとんど見られない。」(「日本国語大辞典」第二版)という記述でも頷けるが、土着して日本の民話・伝説のモチーフになっ
てはいないのである。
- (11) 輸入経路の一つには、「今昔物語集 天竺・震旦部」巻第五「龍樹、俗の時隠形の薬を作る語」第二十四がある。
- (12) 前掲書所収「うづら衣」
- (13) 前掲書所収「蕪村句集」秋の部

- (14) バジール、ジャンパッティスタ著杉山洋子・三宅忠明訳「ペンタメローネ(五日物語)」
- (15) ムゼーウス、ヨーハン・カール・アウグスト著鈴木木満訳「リューベツァールの物語——ドイツ人の民話」 所収
- (16) 関敬吾『日本昔話大成』第三卷 本格昔話一「田螺息子」
- (17) 松本隆信校注『御伽草子集』新潮日本古典集成(第三四回)
- (18) 関敬吾『日本昔話大成』第二卷 本格昔話一「蛇婿入環字型」
- (19) 落語の「元犬もといぬ」にある「白犬は人間に近い」という俗信は案外こうした所に由来しているのかも知れない。
- (20) バートン、リチャード版大場正史訳「千夜一夜物語」の第九百四十一夜―第九百四十六夜「漁師のアブズラーと人魚のアブズラー」に出て来る海に棲息する男の水の精では、容姿も人間とさして変わらず「千夜一夜物語」では手足がちゃんとあるのだが、臀部に魚尾が生えている)、性格も温良な連中である。アイルランドの海の精メロー Mellow の場合、「女のメローは美しいが、男のメローは非常に醜く、顔も体も緑色で、赤いところが鼻と豚のような目をしている。しかし性質は概して愛嬌があり、愉快である」(キャサリン・ブリックス編著『妖精事典』)。
- (21) Hrgg. v. Rolf Hochhuth: Wilhelm Busch Samtliche Bildergeschichten. Die beiden Schwestern.
- (22) Hrgg. v. den Brüdern Grimm: Deutsche Sagen. Winkler-Verlag 1965. Nr. 49. Der Wassermann.
- (23) ムゼーウス、ヨーハン・カール・アウグスト著鈴木木満訳「リューベツァールの物語——ドイツ人の民話」 所収
- (24) バートン、リチャード版大場正史訳「千夜一夜物語」第七百七十九夜―第八百三十一夜。なお、フランスのマルドリユス版「ハッサン・アル・バズリ」(豊島・佐藤・渡辺・岡部訳「千一夜物語」)では第五百七十六夜―第六百十五夜と短い。
- (25) 久松潜一校註『風土記』上下 日本古典全書
- (26) 世阿弥作の能楽「羽衣」はこれに基づいたものかも知れない。しかし、松の枝に懸かっていた羽衣を拾った漁師けりうし伯龍は、天人の願いに応じて返却、天人は喜んで東遊を舞いながら天に昇って行く。民話の世界と異なり、常識的・倫理的である。
- (27) トンプソン、ステイス著荒木博之・石原綏代訳「民間説話——理論と展開——」上 第二章
- (28) Hrgg. von Paul Zaunert: Deutsche Märchen seit Grimm. 1912/22. Neuauflage in einem Band. Bearbeitet und mit Nachweisen versehen von Eirliche Moser-Rath. Diederichs Verlag 1976. Nr.11 Der Jäger und Schwanejungfrau.
- (29) ツアネルト、パウル編鈴木木満訳・注・解説「獵師と白鳥乙女」 武蔵大学人文学会雑誌第三十二卷第一・三号所収
- (30) 鈴木木満訳「世界の民話 8 中近東」きょうせい 昭和五十一年初版 平成十一年新装版所収 三十五「かえるの王女」
- (31) トンプソン、ステイス著荒木博之・石原綏代訳「民間説話——理論と展開——」下 第六章
- (32) 馮夢龍作太田辰夫訳「平妖伝」中国古典文学大系三十六

- (33) 日本二十回本『三遂平妖伝』には全く狐は登場しない。
- (34) 蒲松齡著柴田天馬訳『完訳聊齋志異』全八巻
- (35) 話本を増訂、時に話を創作して、話本の体裁を保ちつつ、読み物として刊行したもの。
- (36) 駒田信一他訳『三言一抄』中国古典文学全集第十九巻所収 解説(松枝茂夫)
- (37) 李防撰『太平廣記五百巻』巻四百二十七「虎類」四「天寶選人」
- (38) トンプソン、ステイス著荒木博之・石原紘代訳『民間説話——理論と展開——』下 第六章
- (39) 李防撰『太平廣記五百巻』巻四百二十九「虎類」八「申屠澄」
- (40) 前掲書 巻四百三十三「虎類」二十一「崔縉」
- (41) 「むかしから親に似ぬ子は鬼子じゃといふが、似たも道理よな」 虎寛本狂言・二千石(室町末—近世初) (『日本国語大辞典第二版』)
- (42) 妖魔はその名前、あるいは年齢を知られると、知った者の自由にされる、という古い民間信仰がある。
- (43) 水を入れた卵の殻が火の上に置かれると、あたまでっかち Kotzkopf はこう言った。
- おいらの歳はヴェスタールト Westerwald (ライン・シーファー山地 Rheinisches Schiefergebirge の一部の名称) とおんなじさ、
それでも、殻で湯を沸かすなどあ見たことあねえ。
- (44) Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Deutsche Sagen. Nr. 82. Der Wechselbalg.
Hrsg. von den Brüdern Grimm. Deutsche Sagen. Nr. 82. Der Wechselbalg.
なお、グリム兄弟の注によれば、「取替え子」は通常七歳以上にはならない。しかしながら十八年から十九年生きるとする話もある、という。Ein Wechselbalg wird gewöhnlich nicht älter als sieben Jahre nach andern jedoch sollen sie achtzehn bis neunzehn Jahre leben.」とのこと。これを以てしても、いわゆる「取替え子」が先天的な病気を負った虚弱な子じもであることが知れよう。
- (45) Deutsche Sagen. Nr. 83. Der Wechselbalg im Wasser.
- (46) 武田祐吉校注『日本霊異記』日本古典全書 に拠る。ただし、振り仮名は努めて補った。
- (47) 高田衛編・校注『江戸怪談集』上。
- (48) 蒲松齡著柴田天馬訳『完訳聊齋志異』第八巻
- (49) 千田九一他訳『今古奇観』上 中国古典文学全集第十八巻

参考文献

和書(和訳を含む)

- 池上洵一編『今昔物語集 天竺・震旦部』岩波文庫 二〇〇一年初版
- 池田亀鑑『全講枕草子』至文堂 一九六七年
- 泉鏡花著『鏡花全集』全廿九卷 岩波書店 昭和五十一年第二刷
- 白田甚五郎・新聞進一・外村南都子・徳江元正校注『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』新編日本古典文学全集四十二 小学館 二〇〇〇年第一版
- 加藤省庵『さへづり草』明治三年成立。翻刻本は室町岩雄編(明治四十三―四十五年)
- 駒田信二他訳『三言二拍抄』中国古典文学全集第十九卷所収 平凡社 昭和三十七年版
- 鈴木満訳『世界の民話8 中近東』ぎょうせい 昭和五十二年初版 平成十一年新装版
- 関敬吾『日本昔話大成』全十二卷 角川書店 昭和五十三年初版
- 千田九一他訳『今古奇観』上 中国古典文学全集第十八卷 平凡社 昭和三十七年第五版
- 高田衛編・校注『江戸怪談集』上中下 岩波文庫 一九九〇年第六刷
- 武田祐吉校注『日本靈異記』日本古典全書 朝日新聞社 昭和四十七年第十五版
- 田中重太郎校注『枕草子』日本古典全書 朝日新聞社 昭和二十二年初版
- ツアウネルト、パウル編鈴木満訳・注・解説『狐師と白鳥乙女』武蔵大学人文学会雑誌第三十二卷第一・三号 平成十三年三月
- トンブソン、ステイス著荒木博之・石原綾代訳『民間説話―理論と展開―』上下 現代教養文庫 社会思想社 昭和五十二年初版
- 贅川他石編『俳文俳句集』日本名著全集江戸文芸部 第二十七卷 日本名著全集刊行会 昭和三年
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編集『日本国語大辞典第二版』小学館 二〇〇一年第一刷
- 日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』一九八三年第一刷 岩波書店
- バジレ、ジャンパッティスタ著杉山洋子・三宅忠明訳『ペンタメローネ(五日物語)』大修館書店 一九九五年初版
- バートン、リチャード版大場正史訳『全訳千一夜物語』全二十一卷 角川文庫 昭和二十六年―三十二年初版
- 久松潜一校註『風土記』上下 日本古典全書 朝日新聞社 一九五九―六〇年
- 馮夢龍作太田辰夫訳『平妖伝』中国古典文学大系三十六 平凡社 昭和四十一年初版
- ブリッグズ、キャサリン編著平野敬一・井村君江・三宅忠明・吉田新一共訳『妖精事典』富山房 一九九五年第三刷

- 蒲松齡著柴田天馬訳『完訳聊齋志異』全八巻 角川文庫 昭和三十一年初版
松尾聡・永井和子校注・訳 日本古典文学全集十一『枕草子』小学館 昭和四十九年
松本隆信校注『御伽草子集』新潮日本古典集成〔第三四回〕新潮社 昭和五十五年
マルドリユス版豊島與志雄・佐藤正彰・渡辺一夫・岡部正孝訳『千一夜物語』全二十六巻 岩波文庫 昭和十五―三十四年第一刷
ムゼーウス、ヨーハン・カール・アウグスト著鈴木満訳『リューベツァールの物語―ドイツ人の民話』国書刊行会 二〇〇三年初版
渡辺実校注『枕草子』新日本古典文学大系二十五 岩波書店 一九九一年第一刷

洋書

- Busch, Wilhelm: Samtliche Bildergeschichten. Prisma Verlag.
Grimm, Jacob und Wilhelm: Deutsche Sagen. Zwei Bände in einem Band. Winkler-Verlag 1965.
Grimm, Jacob und Wilhelm: Kinder- und Hausmärchen. Winkler-Verlag 1978.
Zauert, Paul: Deutsche Märchen seit Grimm. 1912/22. Neuauflage in einem Band. Bearbeitet und mit Nachweisen versehen von Eilfriede Moser-Rath. Eugen Diederichs Verlag 1976.

漢籍

- 蒲松齡『聊齋誌異』上下 漢風出版社 二〇〇〇(民国八十九)年初版三印
李昉撰『太平廣記五百卷』新興書局 中華民國五十一年初版

敬愛する原幸雄先生の特別任用教授ご就任記念号に敢えてこの拙論を捧げます。「枯れ木も山の賑わい」とやら。長年のお付き合いの誼に縋り、伏して先生のご寛恕を希うしだい。先生の今後のご健勝とご洪福を心から祈念いたします。

平成十六（二〇〇四）年睦月五日

鈴木 満 謹識

（二〇〇四年一月八日 受理）